

認定カウンセラー会 ニュースレター

日本カウンセリング学会 認定カウンセラー会
 〒112-0012 東京都文京区大塚3-5-2 佑和(ゆうわ)ビル2F
 TEL&FAX 03-6304-1233

認定カウンセラー会の会長に就任して

田上不二夫

(1) 地域社会で姿の見える認定カウンセラーに

7月の総会で会長に就任しました。水野修次郎副会長ともども3年間よろしくお願いたします。就任期間中に、私がやっていきたいことは地域社会で認定カウンセラーの姿が見えるようにしたいということです。

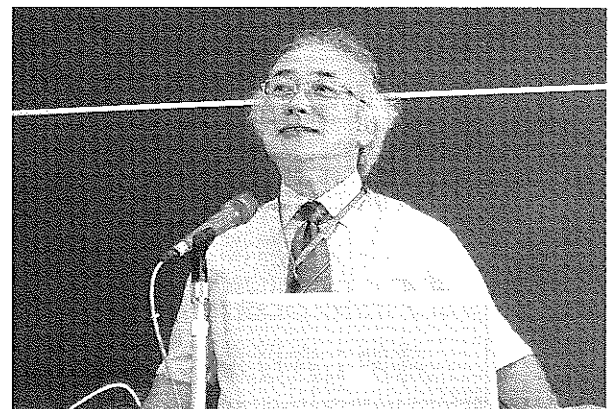
認定カウンセラーは、意義のある仕事をしてきました。しかし、一方で地域社会での活動が不足していたように思います。そのひとつの原因は、認定カウンセラー同士の連携不足があったのではないのでしょうか。認定カウンセラー会は、認定カウンセラーがつながり合い協力して活動するのを支える組織になれないのでしょうか。

認定カウンセラーは、国民の苦しみに背を向けるのではなく、社会問題のうち自分たちが取り組める課題を見つけ、まず自分が声をあげる。何人か集まったら、やれることをやってみる。その活動を認定カウンセラー会がサポートする。こんな仕組みを、私の就任期間中に作っていきたくと思っています。それには会員相互の連携とアイデアと積極性が必要です。理事はもちろんですが、理事ではない会員のみなさまと一緒に、大それたことではなく、できる範囲で社会貢献したいと思っています。

危機支援部会を中心とした活動や支部をつくる動きなど、すでに会員は動き出しています。この動きをさらに大きく広げていきましょう。やれることをする。無理はしない。無理している事は長く続かない。しかし、のろくても歩みを止めない。試行錯誤しながら前進していく。ささやかなことでもやってみる。こんな地味な姿が、認定カウンセラーらしくていいではないですか。

(2) 支部をつくりましょう

認定カウンセラーが協力しあい支え合うには、近くで交流できる支部が必要になるでしょう。また地域で活動するにも支部があったほうが便利に違いありません。また准認定カウンセラーの資格認定が始まります。本会に入会した准認定カウンセラーが認定カウンセラーの資格を取るための支援も必要です。つまりカウンセリング実践のサポートやスーパービジョンも必要となるでしょう。援助する認定カウンセラーのスーパーバイザーとしての技量の向上も必要です。支部で企画するグループスーパービジョンに参加するのも、スーパーバイザーとしての学びになると思います。そして、何よりも自分が実践で困っ



2010.9.4 第43回日本カウンセリング学会大会
 認定カウンセラー会自主企画シンポジウムで司会する田上不二夫新会長

たときに仲間を支えられる場にグループスーパービジョンはなることでしょう。グループスーパービジョンは、カウンセラーとしての仕事をして行くうえでの心の支えになることが期待できます。

支部をつくるには、認定カウンセラーが核となって、学会の会員に呼び掛けてください。栃木県と長野県には、すでに支部があります。支部の結成や運営について具体的な助言を得ることができると思います。支部ができると、支部主催の研修会の費用について学会から補助を受けることができます。

(3) 認定スーパーバイザーとしての研鑽を

会員のなかに認定スーパーバイザーになっている人も多いと思います。そのほかの会員もスーパーバイザーを目指している人は多いことでしょう。本会にとって、スーパービジョンは不可欠です。学会でもスーパービジョン制度の整備を急いでいます。

認定カウンセラーの資格認定試験委員の会議で、受験者が認定スーパーバイザーから指導を受けているが、スーパーバイザーの行っているカウンセリングが適切に行われていない場合があるという指摘や、スーパーバイザーがカウンセラーとしての自分の課題を自覚できていないことがあるという危惧が指摘されています。スーパーバイザーは、スーパーバイザーが行っているカウンセリングのクライアントに責任をもっていること、つまりスーパーバイザーが成果をあげるように援助するとともに、そのプロセスでスーパーバイザーが十分学べるようになっているのか、なっていない場合があるのではないかという議論が起きています。

またスーパーバイザーとスーパーバイザーの協働関係が成立していないように感じる場合があるという指摘があります。スーパーバイザーとスーパーバイザーは役割の違いはありますが、カウンセラーとクライアントの関係のように対等の人間関係です。スーパービジョンはカウンセリングモデルを体験する場でもあるわけです。スーパービジョンの場で目標の共有や協働関係をつくりあげているだけでなく、「スーパービジョン報告書」にもスーパーバイザーの助言をスーパーバイザーがどのように受け止めているのかという、スーパービジョンの教育プロセスがみえるように記述してほしいという要望が出ています。

そして認定スーパーバイザーが認定カウンセラー会の相互研究会に参加し、スーパービジョンについて研鑽を積む必要が指摘されています。お忙しいことと思いますが、認定カウンセラー会の相互研究会に参加してくださることを希望します。そして共に活動していきましょう。

案内

◇相互研究・研修会 第4回 2010年11月21日(日)

第5回 2011年2月6日(日)

会場は、いずれもTKP代々木ビジネスセンター(前回と同じ)

◇公開セミナー 11月28日(日)13:30~

会場は、麗澤大学1503教室 JR常磐線南柏駅より徒歩13分

テーマ 「豊かに生きる知恵と技」

講師：青戸泰子(岐阜女子大学) 佐藤綾子(日本大学)

2010年度 総会報告 (要旨)

・日時 2010年7月4日(日) 13:00~14:00
 ・会場 TKP代々木ビジネスセンター2号館ホール25A

※4月1日現在の会員数
 987名

◇審議事項

- ① 2009年度事業報告(案) ② 2009年度決算報告(案) いずれも承認された。
 ③ 2010年度事業計画(案) ④ 2010年度収支予算(案)

【事業計画】

- ・役員選挙の実施〔5月6日投票締め切り、5月16日開票。投票総数633票
 (211通、投票率22%、有効501票 無効78票 白票54票)
 - ・理事会(各回研修会日 9:00~10:00)
 - ・相互研究研修会(第1回 5月23日 第2回 7月4日 第3回 9月23日
 第4回 11月21日 第5回 2011年2月6日)
 - ・公開セミナー 11月28日(日) 麗澤大学「豊かに生きるためのカウンセリング」
 - ・第43回大会企画シンポジウム 9月4日 文教大学「認定カウンセラーの資格を活かす(1)」
 - ・危機支援部会特別研修会(第2回 8月28・29日、登録メンバー研修会は29日。
 「死別の悲しみをわかちあう会」は、6月5日、8月14日、10月2日、12月4日、2011年2月5日)
 - ・ニューズレターの発行 2回(4月、10月を予定) ・公開研修会 未定
- ⑤ 役員改選(案) ⇨ 提案通り承認されました。(会長) 田上 不二夫
 (副会長) 水野 修次郎

なお、理事の役割分担は下記の通りです。

(1) 運営委員会

1. 総務委員会	◎河村茂雄 川俣理恵 山口正二
2. 会計委員会	◎笈田育子 ○刈間澤勇人
3. 広報委員会	◎青戸泰子 ○阿部正直
4. 倫理委員会	◎水野修次郎 相馬誠一 富田久枝 橋本幸晴 阿部正直
5. 研修委員会	◎伊澤茂男 小林正幸 今野能志 鈴木康明 松本 剛
6. 資格委員会	◎上地安昭 ○飯田俊穂 新井肇 小澤康司 熊谷一宏 鈴木敏城 諸富祥彦

(2) 専門部会

職業領域	1. 学校カウンセリング部会	◎河村茂雄 刈間澤勇人 川俣理恵 小林正幸 鈴木敏城 松本 剛 山口正二
	2. 医療・福祉カウンセリング部会	◎飯田俊穂 熊谷一宏
	3. キャリアカウンセリング部会	◎橋本幸晴 ○今野能志
専門領域	1. 危機支援部会	◎小澤康司 阿部正直 新井 肇 伊澤茂男 笈田育子 鈴木康明
	2. コミュニティカウンセリング部会	青戸泰子
	3. スーパービジョン部会	◎上地安昭 富田久枝 諸富祥彦
	4. 倫理教育部会	◎水野修次郎 相馬誠一

⑥ 会則改定(案) ⇨ 承認

- ・第3条(目的)2行目と第5条2.に「または准認定カウンセラー」を追加
- ・第14条運営委員会(6)国家資格委員会を資格委員会に、専門部会(2)看護・福祉を医療・福祉とする

新理事からのメッセージ (順不同 敬称略)

◇鈴木 康明 (東京福祉大学心理学部)

今の所属に移動する時、当初予定していた大学院の科目は、死別の事柄に焦点をあてたものでしたが、いろいろ検討した結果「喪失の悲しみへの援助」としました。つまり、死別だけでなく離別も視野に入れ、広く喪失がもたらす苦悩へのかかわりを考える時間としたのです。今年で3年目を迎えましたが、内容にしても教授方法にしても検討しなければならないことが多く不安です。そして、認定カウンセラーのみなさんと動き出した、悲しみへの援助活動（「死別の悲しみをわかちあう会」）もまた不安です。はたしてどこまで、苦悩する方々のお役に立てるのでしょうか。

そんな私にとり、シシリー・ソングの言葉は勇気を与えてくれます。聖クリストファーホスピスを創設した彼女は二度の来日に際し、「とにかく気がついた者から動くことです。少なくとも私はそうしてきました」としたうえで、「人は志高く生きるのです」と伝えてくれました。

ということで、現在抱える不安についてまとめることで挨拶といたしました。どうぞよろしく願いいたします。

◇冨田 久枝 (千葉大学教育学部)

このたび理事に選出されました冨田久枝です。

私は、現在、未来の幼児教育者を目指す若者の育成に携わっております。近年、幼児教育の現場も他の教育現場と同様、子どもをとりまく人的、物的環境の悪化等により、子育て、子育てに関わる相談や発達支援におけるカウンセラーの役割が注目されております。

私は、保育現場のカウンセラーとして保育所や幼稚園といった現場での発達相談および保育者へのスーパービジョンを行っておりますが、これからも、日本カウンセリング学会認定カウンセラー会の理事として、保育現場はもとより多くの臨床に関わるカウンセリングの普及と発展に努力したいと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

◇川俣 理恵 (都留文科大学地域交流研究センター)

この度、理事を務めさせていただくことになりました川俣理恵です。

私は、大学院時代から思春期・青年期の発達と仲間集団とのかかわりについて興味を持ち、終了後高等学校を中心に、中学校・高等専門学校・教育センター等でカウンセラーとして実践経験を積んできました。学校カウンセリングの活動においては、認定カウンセラーとして児童生徒の教育課題と発達課題の達成を促進する援助を目指し、個別カウンセリング、グループ・アプローチの両方を活用することを意識して活動しております。また、研究会・研修会等に参加して新しい知識を取り入れる、実践から得られた知見を研究としてまとめて論文にしていくといった研修・研究活動も大切に、Working & Learning の精神で研鑽を重ねていきたいと考えております。

若輩ではありますが、認定カウンセラーの皆様の研修活動やネットワーク構築等の下支えができるよう、どんな仕事もすばやく、正確にこなしていきたいと思っております。微力ですが、今後の認定カウンセラー会の発展に少しでも貢献していきたいと考えておりますので、どうぞよろしく願い致します。

◇新井 肇 「生徒指導とカウンセリング」 (兵庫教育大学)

大学では、主に生徒指導に関する研究を行っています。生徒指導には、①開発的機能 ②予防的機能

③問題解決的機能という三つの局面がありますが、実際には③の問題行動への後追い指導が中心になりがちです。そのため、いつ問題が生じるか分からず（偶発性）、発生後は即座に対応しなければならず（即時性）、指導が入るかどうかは個々の教師と児童・生徒の関係性によるところが大きい（個別性）という点で、理論化を図ることが難しい分野と言えます。ややもすれば、個々の教師の勤や経験知、人間性といったものが働きかけのバックボーンとされ、生徒指導の理論や技法の体系化は不問に付される傾向が見られました。しかし、最近の問題行動の深刻化・多様化の中で、今起きていることの意味を探り、今後起こりうる展開を予測し、ばらばらな理解による矛盾した対応を避けるために、学校現場では実践を裏打ちする知見や理論を求める声が高まっています。

今後、効果的な生徒指導を進めるためには、心理的・発達の理論に基づいて問題の見立てを行う力（アセスメント力）、実際の指導場面での臨機応変で柔軟な対応力（サポート力）、学校内外での連携を可能にする調整力（マネジメント力）が必要になると考えられます。その点で、カウンセリングの理論と技法は、生徒指導における理解と信頼関係形成においてますます不可欠なものになると考えています。

◇伊澤 茂男（作新学院大学）

この度、新理事に選出されました伊澤茂男と申します。

私は、大学での専攻は心理学でしたが、卒業後は国語科高校教員12年、教育センター教育相談部勤務17年の後、現在、大学および大学院で学校臨床心理学やカウンセリング論、対人関係論などを担当しています。長い間、教育や教育相談、研修関係の仕事をしていたので、特に学校臨床に強い関心があり、スクールカウンセラーもさせていただいております。

日本カウンセリング学会および認定カウンセラー会の研修会や大会には、よく参加させていただいておりましたが、今回は企画・運営する側の一員として更に充実・発展していくことを、他の理事の方々とともに努力して参りたいと考えております。

どうぞよろしくお願い致します。

※他の新理事の方々のメッセージは、次号で紹介します

第3回 理事会（2010.9.23）報告（要旨）

◇審議事項に関連して、田上会長より所見あり。決定には至らないが、今後、検討を続ける。

- ・現在の「相互研究・研修会」の名称を「相互研究（研修）会と改める。「教えてもらう」「研修を受ける」という姿勢を越えて、研究の場であることを明確にしたい、がその理由。
また、この研究・研修会に准認定カウンセラーを迎えてどうするかも検討したい。
- ・各専門部会の研究テーマの明確化について。一部の部会を除いて、部会の動きは十分ではない。実践のための研究を積極的に進めたい。（各部会への提言等は省略）
- ・支部活動（都道府県別・地方別等々）をぜひ強めたい。どのように支部を設立するか、どのようなことをしたいのか、何ができるのか、等を明確にしていきたい。そのために、本日の昼食を都道府県別・地方別に分かれてとり、最初の会合にしたい。

◇会則改定（3ページ参照）については、総会での承認どおり了承した。

◇危機支援特別研修会の収支報告、赤字分については、認定会会計より補填することを了承した。

10年度 専門講座(全体研修)報告 その1

第1回(5月23日) 「ピア・サポートの考え方と具体的な進め方」 講師:育英短期大学 森川 澄男

★最近の報道や調査研究によると、不安や悩みを抱えて人間関係がうまく取れなかったり、自分の考えを相手にうまく伝えることが出来ないなどコミュニケーションの不全から生じるさまざまな問題が、子どもたちだけでなく、青年、婦人、成人、そして家族など広範囲にわたって広がっています。このような課題を解決するため、身近な人々が支援のスキルを学び、困っている仲間を支援しようとする試みが、「ピア・サポート」と呼ばれ、世界各地で幅広く展開されるようになりました。日本でも福祉・教育の分野でめざましく取り上げられてきました。今回は学校教育の中での「ピア・サポート」について述べます。

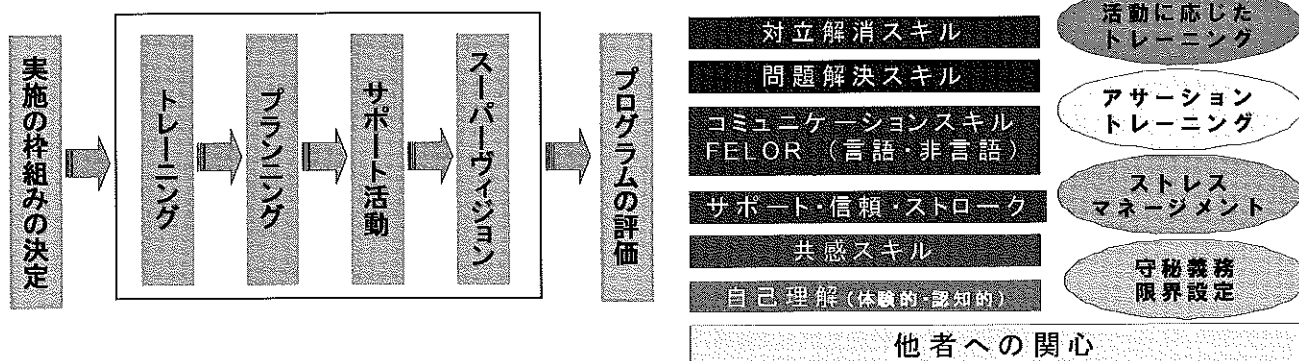
★カナダのピア・サポートの第一人者、トレーナー・コール博士は、「ピア・サポートとは単純にひとが人を支援する」と幅広く定義しています。最近の日本の学校教育を考えると「不登校」「いじめ」をはじめ、子どもたちの心のゆがみを反映し様々な問題行動が教育上の大きな課題になっています。平成7年からはスクールカウンセラー等が学校外からも支援に入りました。しかし、現実はなかなか改善の兆しが見えず、先生方はますます忙しくなっている現実があります。背景には社会の急速な変化やそれに伴う家庭の教育力や地域社会の崩壊、学校社会の抱える問題等と複雑な要素が錯綜し、引き起こされたものと考えられます。特に子どもたちの問題は、学校・学級のなかでは身近な仲間がいち早く気づき、仲間同士で相談して問題の解決にあたるも少なくありません。

★このようななかから身近な仲間の悩みや問題の解決に役立つよう、支援のスキルを学校の教育活動として学ぶ機会を設け、トレーニングを重ね、実践活動に発展させ、仲間や教師のスーパーバイズを受けながら、体験的に「サポート」活動を進めることが、子どもたちの自己有用感や自尊感情を育てる効果的な活動であることが、各地の実践から明らかになってきました。子どもたちののびのびと学校生活を過ごし、教師と子どもの人間関係・教師間の関係も豊かになり、問題行動も減少し、安心・安全の学校環境の確立にも寄与する実践例が増えているのです。(専門学会として日本ピア・サポート学会があります。)

★ピア・サポートプログラムの構造およびトレーニングの内容は下図の通りです。中核になっているスキルは、コミュニケーションのスキルです。

ピア・サポート・プログラムの構造

トレーニングの内容と構造



★推進の中心には教員やスクール・カウンセラーの協働や教員の共通理解が不可欠です。

★この「ピア・サポート」活動は、今後コミュニティにおける活動として展開されることが予想されます。認定カウンセラーの新しい活動分野として広がることを期待します。

(研修会ではいくつかの実習〔問題解決スキルの演習等〕を行いました。)

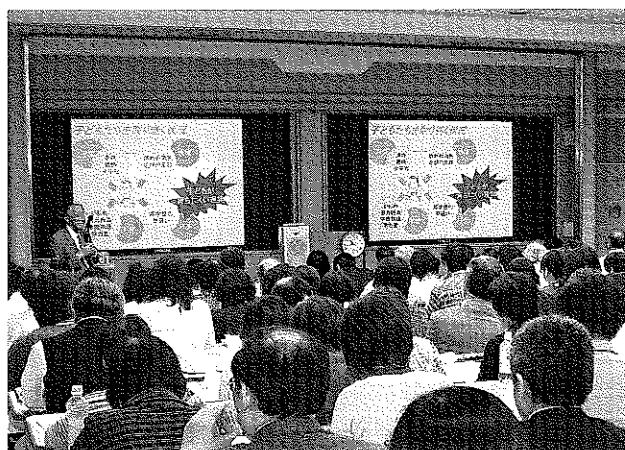
▷参加者のアンケートより

(回答 115名)

1. 研修内容について 5 (46名) 4 (52名)
3 (12名) 2 (1名)

2. 感想・要望

- ・ピアサポータートレーナーの資格をとりましたので、今日の内容はとてもよく分かりました。学校教育に必要なことは十分分かりますが、現場を離れるとそこに入るのにとっても困難を感じます。
- ・ピアサポートの歴史、概要、実践までが学べて、とても勉強になりました。教育現場で働いているので、実践につなげられる具体的な内容が非常に有難かったです。
- ・困った子に声をかける、手をさしのべる、一緒に考えるといった行動が、現代ではトレーニングしなるとなかなか出来ないという状況は、現場にいて強く考えるところであったので、具体的にどのようにトレーニングプログラミングするかということがよく理解出来た。他人をサポートする経験を積むことで、自分自身もエンパワーメント出来るのではないかと思います。
- ・教育現場にいて高校生の受け身の態度がとても気になっています。そして、表面上上手くやるのがコミュニケーションと考えていて、自分としての態度、考えを持ってないことに疑問を感じ、生徒との対応を工夫しています。それらの日常的なことにとっても良いアドバイスになりました。
- ・ピアサポート実践の場面と進め方が理解できました。現場（教育支援センター）で活用を考えたいと思います。
- ・学校現場の実践が参考になりました。すぐ取り組める内容でした。
- ・現在、特別支援学級（知的障害）の担任をしています。知的障害のお子さんに対してもピアサポートは生かせるかも？と思いましたので、早速実践してみようと感じました。
- ・非常に役に立った。学校に導入すれば学校が一変するのではないかと思います。
- ・ピアサポートトレーナー養成講座を受講しようと思うくらい刺激を受け、啓発されました。学校や地域組織に広めていきたいと感じました。
- ・専門家だけでなく子どもたちの力を生かして改



善を図るというピアサポートは、使いやすいし、それが学校にとってもよい方法だと思う。

- ・トレーナー養成講座に申し込みする必要があると感じました。素晴らしい刺激性に満ちたお話でした。ありがとうございました。
- ・先生がおっしゃるようにスキルトレーニングしても実際に使わないと余り意味がないので、そこがソーシャルスキルやエンカウンターとの違いかなと思いました。ですので、8月21、22日、ぜひ研修を受けたいと思いました。よろしくお願いします。
- ・ピアサポートについて耳かじり程度でしたが、分かり易くビデオ、演習と短時間に大変収穫がありました。現在の学校の中で今やっている諸活動を見直し発掘できそうです。
- ・ピアサポートのことが、理論だけでなく具体的に分かって良かったです。養護学校の宿舎に勤めているんですが、工夫してピアサポートの要素を取り入れていきたいです。明日から早速！
- ・分かりやすく、とてもよい講義でした。自分の職場では、まず教師間でピアサポートが必要かも知れません。少し学んでみようと思いました。
- ・ピアサポートについて大変詳しく話していただき、正しい理解の基礎づくりができたように思います。お話が早かったので、少しゆっくりしていただけると聞きやすかったです。
- ・自分にとっては新しい知見を処々で戴いた感じがした。希望としては、更に時間をとって実践の部分に時間を割いていただけたらと思う。次回に期待。
- ・ミニ演習がありがたかったですが、もう少し具体的にやる時間があると更によかったです。

◇第2回(7月4日)「危機支援とキャリア・カウンセリング —その接点と発展—」

講師：小澤康司 (立正大学/危機支援部会)

今野能志 (行動科学研究所/キャリアカウンセリング 部会)

▷参加者のアンケートより (回答86名)

1. 研修内容について 5 (24名) 4 (40名) 3 (17名)
2 (1名) 1 (1名)

2. 感想・要望

- ・危機支援とキャリアカウンセリングを共に考えていく必要があることが再確認できました。事例などを話していただければ、具体的対応やこれからどう動いていけばよいかを考えられたと感じました。
- ・職業を持っていく上で、様々な危機(失業、異動、過酷な労働、精神疾患)や家族や社会の崩壊、経済的問題の激化、格差拡大といった社会的変化に対してどうクライアントをサポートしていくか、やはり他分野の人たちとの連携・協力が不可欠だということを再確認できた。
- ・危機支援とキャリアカウンセリングのコラボレーションは、各々の物の見方に社会現象を解析する視野が加わり、多層的に観るべき態度が描き出されたようで納得できた。社会心理学的究明の手がかりとして理解し易いように思われた。
- ・危機とキャリアの関係がかなり整理されて良かったことと、現在の社会的危機の全体構造がうかがえて良かった。このような中で、どのようにしてカウンセラーとしてかかわるのかの展望について提言が欲しかった。グループでの話し合いは深まった。
- ・学校現場でも、例えば不登校の子どもへの支援として、ただ学校に来るのを見守っているというだけではなく、生きる力・将来への見通しなどを考慮した意欲を育てる支援に繋げていくことが大切だと思いました。そのためにも、具体的事例を通した研修を希望しています。
- ・人生における発達課題において、その時々に関機に出会う可能性があり、その時々に支援するかその重要性を考えさせられました。
- ・キャリアの視点と危機管理の視点を統合した内容であり、共によく理解できた。しかし、これをどうカウンセリングの現場に活かすかが大きな課題でもある。
- ・今野先生、小澤先生のお話に加え、フロアから様々な発言があったことで、現代社会の抱える



- 問題点がより浮き彫りになったように思いました。カウンセラーが他職種と連携していくことがますます求められているように感じました。
- ・カウンセラーとしてよりも人としてどう生きていくことが良いのかと改めて考えることができ、大変良かったです。人がどうかしてくれるという意識が高くなっている気がします。自分が何をしたいのかどう生きていくのか！その一人一人の生き方が日本を、世界を変えていくのだろう……。
- ・相互研修という意味で話し合いの機会が持たれたことは良かったと思います。テーマが大きいので、もう少し絞って話し合えたらと思います。各々のおかれている環境が違うので多岐に渡るのは仕方がないのかなあとも思うのですが…。子どもへのキャリア教育はいつから始めるのか。生き方ということであれば学校教育の始まりと同時かなと考えています…。
- ・キャリア部会と危機支援部会のコラボという視点で取り組まれたことは、今日的課題として良かったと思う。しかし、具体的課題を深めるための時間的余裕がなかったことは残念であった。
- ・キャリアカウンセリングと危機支援についてというテーマ、接点と発展に関する具体性に若干欠けていたと思う。問題提起やあるべき論が講師の立場から論じていただいてもよかったです。焦点がまとまらず、グループワーク(3名)が困難であった。
- ・キャリアの問題と危機支援とのコラボという視点はとても良かったと思います。できれば、具体的な事例をもっと示していただきたかったです。
- ・企業の中には成果主義の競争原理で動き、多くの人はその枠から外れないように生きています。子どもたちだけでなく大人も自分のキャリアを考えている人は少ないと思う。「何が幸せなのか？」を教育するのは本当に難しいと実感しています。

第43回(埼玉県) 認定カウンセラー会企画シンポジウム

・2010年9月4日(土) 10:00~12:00
 ・埼玉県越谷市 文教大学 12101教室

まとめ
 (広報委員 阿部)

テーマ 「認定カウンセラーの資格を活かす(1)」

企画・司会者 田上不二夫 (認定カウンセラー会会長、東京福祉大学心理学部)
 話題提供者 青戸 泰子 (岐阜女子大学文化創造学部)
 中村 恵子 (筑波大学人間総合科学研究科)
 鈴木 康明 (東京福祉大学心理学部)

▷司会者より、企画の趣旨について

- ・認定カウンセラーの社会的認知度がいまいち低いのは、連携して社会活動をしてこなかったことにその一因があるのではないか。(悩みを人生相談や占いの方にもちかける等)
- 認定カウンセラー(会)はどんな社会的活動ができるのか。相談室に閉じこもっているだけでなく、社会支援カウンセラーとして社会に打って出て、人と人を繋ぐネットワーク作りの役割を果たす社会貢献の道を探りたい。今回はその1回目。

▷話題提供者からの提言

【青戸泰子氏の発言】

- ・私の提言は「コミュニティで子どもを育てる」
- ・夢や希望を描けない子どもたち、社会の壁におつかる若者たち。家族機能の低下、人間関係を楽しめない、自己肯定感の低下、人々の孤立化などの中で、生きる力をいかに育てるか。
- ・学校での教育相談では、肯定的な関わりを基本として、次の5点の必要性を痛感している。
 ①カウンセリング(心理学) ②コンサルテーション(現場ではこれが特に求められる) ③心理教育の啓発(予防・ケアのための保護者講演会などが必要) ④危機支援 ⑤システム構築(そのために異業種間のコラボレーション)
- ・学校全体に普遍的予防の考えを定着させる。
- ・地域への支援では、逗子市で「ともに生きる町づくり」に参加してアドバイスしている。
- ・また、「子育て支援」で予防的な関わり・対処的な関わりをアドバイスしているが、コミュニティ援助のポイントだと感じている。
- ・また、「学校支援地域本部事業」として「逗子市小学校サマースクール」を実施、楽しい行事であった。子ども・保護者・教師・高齢者が共に支えあう町づくりの方向が見えた。キャリア形

成のためにも、地域・学校・家庭・行政が共に取り組む事の必要性を実感した。
 ・カウンセラーは、これらの事業に積極的に関わり、皆が愛され、ほめられ、役に立ち必要とされている事を啓発していきたい。

【中村恵子氏の発言】

- ・私の提言は「学校システムを活性化する」
- ・「相談室の機能回復」のため学校現場に支援に入っている。
- ・ある中学校の例。不登校生徒4人に対して相談室で支援が行われていたが、相談室の責任者及び担当教師6名は自信喪失状態であった。支援者の役割分担を具体的に決めコンサルテーションを繰り返し、マネジメントを行った結果、先生方の援助協力も得られ学習援助で高校進学を決意し、教室に復帰する生徒もいた。(チームマネジメント)
- ・不登校なども、個人の適応問題で対応するだけでなく、学校システム全体を改善することで効果が現れてくる。しかし、上記の中学校の場合は、校内には運営能力がないとの管理職の判断で相談室が閉鎖された。管理職に対する援助サポートの必要性を痛感した。
- ・SCが行うコンサルテーションの3つの視点
 1. ケースマネジメント 2. チームマネジメント 3. 学校マネジメント(コーディネーターの育成、システム作り等)



このコンサルテーションでは、現場に入った認定カウンセラーの役割は極めて大きい。

- ・ マネージメントの手順についての図示あり。(問題の分析・組織の形成・複数の解決策の作成と決定・部下の育成、等々8段階)

【鈴木康明氏の発言】

- ・ 私の提言、「死別の悲しみに寄り添う」
- ・ 資料「自殺12年連続3万人台」(死別)、「親が離婚…私の気持ちを聞いて」(離別)の説明、解説あり。
- ・ 「死別の悲しみをわかちあう会」は、今年度から日本カウンセリング学会全体に参加を呼びかけて年5回行っている。その取り組みの様子はS-B2の自主企画シンポジウム(9月4日午後2時~)で4名の認定カウンセラーの参加を得て報告することになっている。
- ・ 人の死は、その人とともに培ってきた関係を途絶させるばかりでなく、その死に対して自分がいかに無力であるかに気づかされ、喪失の悲しみと無力感で苦悩するのだ。
- ・ 死別の悲しみに対しては宗教関係が深くかかわっているが、カウンセリングの新たな対象として、悲嘆、悲哀に焦点をあてた取り組みが始まっており、認定カウンセラーの先行事例をもとに実践の段階に入っており、その役割の大きさを実感している。

▷フロアとの交流 (名前等省略)

- ・ いじめの対応でも、かかわりの入り口は集団的肯定的なかかわりだと感じている。
- ・ 生徒個人の問題、個々の対応ではなく、学校の支援システムで取り組む。援助が有機的に統合されていくこと。その時に「つなぐ人」が重要で、認定カウンセラー(会)の役割がとても大きいと感じる。
- ・ 親も教師も行政もみんな一生懸命なのだが、それぞれバラバラで機能していないケースがある。



やはり「つなぐ人」が必要。

- ・ 逗子市の「こどもサマースクール」を行って地域の出番がたくさんあること、顔の見える活動であったこと、またこの活動の中でもコーディネーターの役割・重要性を実感した。

- ・ 3人の話題提供者が、それぞれ新しい領域を開拓していることに、次の世代を担っていく力強さを感じた。あらためて、総論・志、認定カウンセラー(会)の守備範囲・目的・方法等について伺いたい。(国分先生)

【青戸】コミュニティアプローチを追求したい。いろいろな専門領域での支援(点の支援)からコミュニティ支援に広がっていく、つまりはコミュニティがよくなること。そのつなぎ役も考えていきたい。

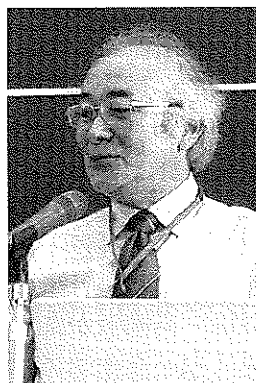
【中村】各論になるが、生活保護家庭の子どもは、親の姿から生きること・生活することを学ばないことが多い。援助ニーズをつなぎあわせて次の新しい援助を作っていきたい。

【鈴木】かけがえのない命・存在、命の尊厳を訴え続けていきたい。そのために、予防・開発的カウンセリングが中心になっていく(治療的カウンセリングの必要性もある)。品よくやっていきたい。

- ・ 専門家との連携、他人の土俵に入っていくことが大切(弁護士や福祉士の手伝い等々)。一人の市民として専門家らしからぬスタイルで入っていくことがポイント。
- ・ その通りである。大上段に構えて入ると抵抗に合ってしまう。顔の見える関係でコラボレーションをしていくことでコミュニティの質が上がっていく。

▷司会者から

- ・ カウンセリングのキーワードであるシステムアプローチ、コミュニティアプローチ、コラボレーション等の重要性が改めて



強調された。

- ・ 学会でもこれらを盛り込んだテキストを作成中である。
- ・ 私たち認定カウンセラーは人と人をつなぐ輪の中に入って、一緒に面白がりながら意義ある活動をしていきましょう。

危機支援部会からの報告

◇第2回 危機支援特別研修会(A) 8月28日(土)・29日(日) 立正大学大崎キャンパス

- ・参加者 申込み13名(2名は2日目のみ参加・キャンセル1名)
- ・内容 ①危機支援活動のあり方・PFA ②ストレスマネジメント・PTSD
③学校危機支援の実際 ④リラクゼーション実習 ⑤遺族へのケア
⑥危機支援活動体制について(合同研修)

◇第1回 登録メンバー研修会 8月29日(日) 立正大学 大崎キャンパス

- ・参加者 11名(昨年第1回特別研修会修了者)
- ・内容 ①危機支援、想定演習 ②災害支援想定演習(都県別グループで検討)
③危機支援活動体制について(第2回研修会参加者と合同、グループで検討)

◇講師・スタッフ等 ・講師 小澤、青戸、飯田、熊谷、鈴木
・スタッフ 阿部、高倉、東田、清水、笈田、安間、田丸、水田、荒川

◇危機支援登録メンバーの数 ①2009年研修後の登録者 35名
②埼玉カウンセリングセンターの登録者 11名(4名は①でカウント)
③危機支援部会スタッフ 10名
④2010年研修後の登録者 現在集約中

◆危機支援活動体制についての話し合いの例

	セッションGで話し合ったこと	合同研修で話し合ったこと
埼玉 ブ ロ ッ ク	<p>◇前もっての準備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・看板、ユニフォーム、都道府県連絡先一覧表 ・災害用携帯・個人用かけつけセット(寝袋、ヘルメット、軍手、マジックラジオ、食料、簡易トイレ、他) <p>1. 地震発生～翌日→埼玉本部設置、打合せ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・危機支援チームへの連絡 ・現地行政本部との交渉(TEL or 現地で) ・半年間の支援計画を伝える ・現地に本部を置く <p>2. 3日目～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まず初期より関係づくりのために手伝い <p>3. 半年、1年</p>	<p>1. 対策本部 ・県内に置く時(震源地埼玉) (活動拠点) ⇨大宮(高倉事務所) (認定会と連携、社協、日赤との連携も開始、地域、前田・牧島先生)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・県外に置く時⇨認定会としての本部(現地) ◎認定会本部事務所は必要 ・日赤との連携をとっておく、その他 <p>2. 支援計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・登録者名簿に各自の得意分野を明記しておく(何の支援ができるかの集約、メンバーリストにもれた人はどうする?) ・避難所支援の情報収集、ニーズの把握 ・現時点でできること(マッサージ、アロマセラピー、子どもとゲームや遊び、朗読、リラクゼーション、動作法、傾聴訓練研修会)
神奈川 ブ ロ ッ ク	<p>〈エンジェルサポートチーム〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目的 中長期の被災地住民の心のケアを図る ・対象 子ども(幼・小学校) ・準備作業 ・情報収集(発生状況、活動可能性、受入れ機関) ・装備品の準備(帽子、ベスト、テント、寝袋等) ・資金(交通、食糧、宿泊) <p>・活動内容</p> <p>(初期) 発生直後から1週間・活動のための情報収集(2～3名現地入り)・活動内容の策定</p> <p>(中長期)・幼児対象(親子)のレクリエーション・小学生対象のレク・子どものストレスの変化を把握する(心理教育)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本部づくり、本部長を決める(募集!) ・指示系統、連絡体制づくり(連絡網、メンバーリストを活用する) ・役割を決める ・認定会との関係は? 小澤T(部会長)が会長と連絡をとりあう? <p>◇現地の視察、その情報を基に出番を策定する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・直後は力仕事?⇨関係作りを優先、心のケアはその後 ・支援者のリソース、特技の集約 ・関係諸機関の整理(区市町村防災課、保健所、教育委員会、社協、ボランティアセンター、福祉事務所、発達障害関係、高齢者一人暮らし、女性センター、等々)

- ◎参加者の感想 ・各地域ごとにシュミレーションしたことは有意義であった。特に、自分たちがどの程度考えているか、自分たちがどの程度仮想できるか、それらに対する今現在考えられる対応等について改めて確認できた。また、そこから過不足について助言や話し合いが出来たことは、今後の具体的対応に向けて貴重で継続すべきと感じた。

【小澤プラン】⇒今後、メンバーの話し合いで詰めていく

1. 対策本部（避難所——活動拠点）
2. 現場の視察——被害の状況
 - ・被災者のニーズ
 - ・行政との連携
 - ・キーパーソンと団体（保健所・日赤・市教委、等々）
 - ・交通手段、宿、等
3. 支援計画の作成
 - 〈避難所への支援〉
 - ・自分のリソースは何か（例：リラクゼーション＋カウンセリング）
 - ・心理教育、講和（例：危機支援、ストレスマネジメント）
（幼稚園・小・中・高・老人ホームなどで）
 - ・避難所訪問
 - ・ストレス調査
 - ・自治体職員へのケア
 - 〈仮設住宅への支援〉 ⇒ 状況にあわせて後日計画
4. 支援体制の構築
 - ・メンバー（登録、現地CO、リソースの確認、認定会の承認）と日程
 - ・本部 事務局（後方支援）
5. 計画の実行 ⇒ 関係諸団体の承諾
6. 義援金の募金
7. 車、ユニフォーム、看板、携帯、メール、食料、水、等々

INFORMATION

◇事務局から資格更新についてのお知らせ

- ・本学会が認める「認定カウンセラー」の資格更新を希望する場合には、資格認定を得た日より満5年を経過する前日までに、I～IX（「認定カウンセラー」資格更新細則を参照）の領域から3領域以上にわたって、計15ポイント以上を取得してください。なお、7年更新の場合には20ポイント以上を取得することが条件です。また、日本カウンセリング学会大会については必修になっておりますのでご留意ください。
- ・2006年5月8日の「認定カウンセラー」資格認定細則の改正により、更新は毎年4月1日付で一斉に行うことになりました。2006年3月31日以前に認定・更新された会員の皆さまは、各自が所持している認定カウンセラー資格の有効期限を、年度末の3月31日まで延期し、4月1日付で認定書を発行しますので、ご了承ください。
- ・なお、更新の時期になりましたら、事務局より関係書類を発送いたします。

【編集後記】

- ・認定カウンセラー(会)の社会的活動の模索が始まりました。各専門部会でも、社会貢献の道を本格的に探りたい。まずは、小さなことでもやれるところから、手さぐりでの行動を起こしたい。
- ・第3回の研究研修会（9月23日）の昼食時に、都道府県別・地方別に集まったことは、その第一歩。その中から次につながる何かが生まれてくることを期待したい。
- ・今回の第8号より、A4判サイズでお届けします。 （広報委員 阿部）